

## 確かな学びを支える国語科学習の授業と評価

～ 国語科から見た自己評価・相互評価と小中連携～

栗田稔生 島末智成 森知佐登

### はじめに

昨年度に残った課題は、学習をより確かなものにしていくため、子どもたちが自分たちが取り組んでいる学習の状況や成果を自分自身で意識できるようにすること。学習の中に「学び合い」を積極的に取り入れていくこと。小学校の限られた時間だけではなく、小学校卒業後の中学校の活動や学習も視野に入れていくことであった。

その課題を少しでも解決していく為、本年度は、国語科の学習の中で行われる自己評価、相互評価と国語科から見た小中連携について考えていくこととし、研究テーマを「確かな学びを支える国語科学習の授業と評価」とした。

そこで、国語科から見た自己評価と相互評価について 学習の中での「学び合い」について 小中連携について、本年度の実践をもとに検証していくことにする。

### 1 自己評価と相互評価の関係

#### (1) 1年生の実践より

1年生の「じゃんけんをつくろう」の実践では、自分が作ったじゃんけんの「勝つ理由がわかるかどうか」「教材文で学習した文型を使って説明する文を書いたかどうか」について交流した。

「勝つ理由」と「文型」を自分のワークシートに書いているかどうかを読み合う交流として設定した活動であるので、子どもたちはどんな記述に着目して友だちのワークシートを読んだらいいのかということを意識している。

この交流を通じて、自分が勝つ理由をしっかりと書いていると考えていても、相手にうまく伝わらなかったと感じたり、学習した文型をしっかりと使うことで、相手にうまく伝わるということを感じたりすることができた。

つまり、他者との相互交流の中で、自分自身が見え、自分の学習の成果が自己評価できることにつながっているのである。



図2 - 1 他者との交流で自分に気づく

#### (2) 2年生の実践より

2年生の「むかし話をしようかいしよう」の実践では、自分がかいた「むかし話のしようかいポスター」を交流した。

交流する際には、あらかじめどのような観点で友だちの作品を読んだらいいのかを明確にしてから交流するという活動にした。

この活動は、評価規準を明確にし、その規準で友だちの作品を読んでいくという活動になっている。

つまり、相互評価の活動になっているの

である。そうすることで、学習中の交流が、漠然としたお互いの良さや改善点をを見つけるといった活動にならないという効果があると考えている。

また、「自分のポスターの読み手を引きつける工夫はどんなことか」ということを交流する前に自分自身で意識しておき、そのことが相手に伝わったかどうかを交流するようにしている。

そうすることで、「むかし話のしょうかいポスター」を交流し相互評価することが自分の工夫が伝わったかどうかという学習の成果を自己評価できることにつながっているのである。



図 2 - 2 相互評価が自己評価を促す

## 2 「学び合い」を促す活動の工夫

4年生の「詩の続きを書こう」の実践では、続きの詩を書く前に、もとになる「もりのくまさん」をしっかりと読み取る活動を取り入れた。つまり、教材の場面設定や登場人物の性格などを分析する活動を取り入れたということである。

そうすることで、漠然と続きの詩を書く活動ではなく、自分たちで分析したことをもとにして、物語としての整合性や、場面の設定を意識して書いていくことができた。

子ども達の様子を観察していると、分析をもとにした意見を出し合い、言葉を選び

ながら詩を書き進めることができていた。



図 2 - 3 「学び合い」を促す活動

お互いの意見を出し合う際のよりどころを意識できるような活動を工夫することで、場面の設定にふさわしくない意見や記述は修正されていった。つまり、子ども達は自然な「学び合い」をすることができたと考えている。

## 3 小中連携について

本年度は、「書く」ということから連携を始めていった。小学生が書いた作文と中学生が書いた作文を分析することによって「書くことの育ち」や「文種の違い」を明らかにすることができたことは成果と言える。

小中連携の第1歩として「書くこと」の育ちから

例...表現の特徴の育ち	
低学年	事実を詳しく書く、出来事を時間順に書く。
中学年	自分の考えを明確に出す。理由をつける。
高学年	相手を意識して自分の考えを書く。
中学生	社会を構成する一員としての意識が見られる。

図 2 - 4 書くことの育ち（抜粋）

また、大阪教育大学附属平野中学校の先生方と話し合う機会を設け、中学校の学習にも自己評価や相互評価、学び合いを伴っ

た活動が取り入れられていることを確認することができた。

このことから、やはり小学校での学習に自己評価や相互評価を意識して取り入れることの必要性や学び合いを積極的に進めていく必要性を意識できたことは成果と言える。

#### おわりに

実践を重ねていくことで、自己評価や相互評価、学び合いについて、以下のことが明らかになってきた。

- ・ 相互評価と自己評価、学び合いは、それぞれが密接につながっている。
- ・ 相互評価と自己評価、学び合いを、小学校の学習で積極的に取り入れることは中学校と連携につながる。

一つめに関しては、交流をした際に、友だちに「いい工夫だね。」と評価規準に沿って認められたことが、自分が工夫したことと一致していれば、自分自身の成果を自己評価できるということになる。また、一致していなければ、自分の活動に対しての課題を自己評価できるということになる。

この相互評価は「学び合い」を促すことになっている。規準を明確にしたり、活動のよりどころをはっきりと子どもたちが意識したりする活動を取り入れてこそ漠然とした活動が、相互評価を伴った、「学び合い」になっていく。この「学び合い」をしながら、学習の成果は高まっていくことになる。

二つめに関しては、中学校の先生方と話し合う機会を設けたり、実際に授業を参観させて頂き確認できた。本年度取り組んできたことが、6年生の学習で完結してしまうものではなく、中学校に進学しても生かされていく学習になっていることが確認できたということである。

だからこそ、小学校で確実に学習の中に取り入れていく必要性も意識することができた。

これらのことが明らかになったことは、本年度の成果と言える。

しかし、前述の明らかになった2つのことに関連して、以下のことは課題に残っている。

まず一つめに関しては、「学び合い」「相互評価や自己評価」を取り入れ、どんな力を国語科としてつけていくのかを明確にしていかななくてはいけないことである。

二つめに関しては、「書くこと」から始まった小中連携を自己評価や相互評価、学び合いも意識しながら、他の領域などでも考えて行かなくてはいけないことである。



図2 - 5 「学び合い」活動の活性化